

お薦めの一冊

『この国のために—川路聖謨』

高木國雄 著 鳥影社 全2巻 3,800円(本体)

徳川幕府滅亡に殉じた高官の見事な生涯
取材と咀嚼に力を入れ描き切った大作

会員 坂井 興一 (21期)



20期会員で、東弁・日弁連で理事者もなされた高木氏の手になる感動巨編です。豊後日田代官所下級役人の子で貧乏小普請川路家の貧乏養子となった内藤弥吉(のちの聖謨)、^{としあきら}而して幕臣とは言い難い出自ながら、唯ひとり幕府滅亡に殉じた高官の見事な生涯を、6年を掛けて同人誌「海」に掲載した長編とは云え、読み終えるのが勿体ない位充実しています。日本ペンクラブ会員の氏には、取り扱い事件に着想を得た短編集「やつらはどこから」、故郷先覚の開拓事業・灌漑トンネル掘削の苦闘を描いた「佐久の水音・五郎兵衛の夢」等の“素人離れ”の作品がありました。著名人の川路には吉村昭の伝記的決定版「落日の宴」があるので、読み始めは“いい度胸だなあ!”との気分だったのですが、巻措く能わざる臨場感溢れる情景と氏自身が憑依した如くの心境描写から見ても、これは取材と咀嚼に大変力を入れ、この国の最良・最高官僚を見事に描き切った大作と言えましょう。巻末参考文献を見る迄もないその努力は、川路の生き様を通しての当代批評の止み難さからと思われそうですが、副題「^{ものふ}武士の生涯」とあるように、かくあるべし・ありたいとの熱い思いで、類を見ない晩年・自裁迄の多端だった生涯を書き通した人間物語です。と云っても真面目一方の説教・教訓ものではなく、飄々として香気漂う筆者のお人柄を彷彿させる味わいがあります。小普請組での、早朝からホトホト疲れる長時間就活運動・支配役への「逢対」にめげていません。思い掛けない様々な好意で得た支配勘定や評定所書物方出役での、誰に指図された訳でなく・出過ぎもしない、そして世を知る道しるべの「世事見聞録」を座右に、溜まりに溜まった事件の、反感

を買わないよう処理する日々は、もしかして鼻歌交じりだったと思われる快調な筆致です。また、牛込御門内・柳生新蔭流中野金四郎道場での、文武両道川路の剣の修業描写は、剣道有段者の著者自身の体感からのもので、想像だけでの藤沢周平は及ばず、高段剣士ながら描写力今ひとつの津本陽も顔負けではないかと。そしていよいよ川路が世に出た11代家齊の頃の「仙石騒動」では、錯綜した事実関係の整理、藩と幕閣のしがらみなど、幕府の官僚組織・法制史的調べがよくこなれて行き届き、あらためて勉強させられました。件の吉村本の感動場面は、長崎奉行となって老中並扱いで小倉・佐賀・福岡藩の送迎を受け、或いは故郷日田の関係者と再会するあたりなのですが、著者は、一揆に揺れた直後の佐渡奉行の日々、水野忠邦政権下、左遷気味ではあるがのどかな市井物味わいのある奈良奉行の日々も見逃しません。本書庄巻の下りにして執筆動機でもある、諸人の知るロシア使節プチャーチンとの、手探りから始まって人格的信義の交わりに至る多難な対露曲折の交渉経緯、やがて一橋派と目されて井伊大老に遠ざけられ、慶応4年3月の江戸城総攻撃と運命を共にする筈だった日までの超人的精励の年月。と云っても実弟で後任の外国奉行となった井上清直とのこと、長男(曾孫はのちの文人川路柳虹)を失う悲嘆や、結構マメな発展家の人柄もマメに書かれている。そんな訳で、これは素人の書けるものじゃない、否否、向こう見ずの素人だからこそ書けた傑作大作ではないか、だからいきなりの著名賞でもおかしくないと感得した次第でした。(尚、本書は大部且つ非廉価ですが、弁護士会等の図書館で借り出し可能です。)